

## 知的障害者の地域生活支援の思想

藤嶋 由

### The idea of Community support's of the people with intellectual disabilities

Yu FUJISHIMA

#### Abstract

Since “Social Welfare law” is concluded in 1951, the practices of the services to people with handicapped has aimed at the realization of value and the dignity consistently to the people with intellectual disabilities. So, this paper deepends about the idea of the Community support's of the people with intellectual disabilities who is one practices of the services to people with handicapped.

As a result, the practices of the Community support's to the people with intellectual disabilities with having the idea of the equality of “the relation” based on the relation of the subject turned to the realization in the equality of the relation modern age citizen difficulty people right meaning and subject.

**Key Words** : People with Intellectual Disabilities, Community Support's, Phenomenology, Sympathy

**キーワード** : 知的障害者、地域生活支援、現象学、共感

#### 1. はじめに

「社会福祉法」の前身である「社会福祉事業法」が1951年に成立して以来、障害者福祉サービスの実践は、一貫して知的障害者の人間的価値やその尊厳の実現を目指してきた。

糸賀一雄が、「福祉の思想は、その根底に福祉の思想をもっている」「福祉の思想は行動的な実践のなかで、吟味され、育つのである」（糸賀 1968：64）と述べているように、これまで障害者福祉サービスの実践は、障害を持つ人びとを意識的無意識的に排他する社会観との対峙の中、常に障害を持つ人びとの人間的価値やその尊厳に根ざした思想を有し

ながら、その実践を展開してきた。このことは、時代的変遷を経た今、なお、変わりはない。

そこで本稿では、今日、障害者福祉サービスの実践の一つとして、北海道伊達市<sup>1)</sup>などでその実践が広く展開されている知的障害者の地域生活支援の思想について考察を深めている。

なお、本稿では、障害者福祉サービスの実践を地域社会とのかかわりにおける思想として捉え、地域生活の充実化を目指す活動という意味で「地域生活支援」という用語を使用していることをあらかじめお断りしておきたい。

## 2. ノーマリゼーション原理が障害者福祉サービスに与えた影響

知的障害者の生活を可能な限り障害を持たない人びとと同様なものへと近づけること、すなわちノーマリゼーション原理が障害者福祉サービスの基本的原理となってから約四半世紀が経過した。特に、北欧を起源に発展してきたこの概念が、米国の W. ヴォルフエンズベルガーによって再構成され、「社会的役割の実現 (=Social Role Valorization)」という言葉で表現され始めて以降、その実践は、知的障害者が社会の中で「市民」として生活していくのをどの程度まで可能としていくのかを重要な課題としながら、彼ら一人ひとりの地域生活の充実化を目指している。

一般的に、わが国において、この知的障害者の地域生活支援が、一部、本格化するのには、1981年の「国際障害者年」以降であり、その後の「国連・障害者の10年」の期間である。

従来、障害者福祉サービスの実践は、障害を持つ人びとを意識的に排他する社会観との対峙の中、入所施設を中心に、その実践を展開してきた。糸賀一雄が「施設社会事業はその極限的な状況のなかに投げだされている人びとの生命と自由を尊重し、そのことをとおして、社会に呼びかける役割をになっているのである」(糸賀 1968:15)と述べているように、障害を持つ人びとへの福祉感覚が、およそ今日とはかけ離れ、脆弱だった時代、わが国のそれは、知的障害者の人間的価値や尊厳の実現を社会に対して問いかける極めて人間尊重の原理に基づく思想であった。

わが国の入所施設の実践の歴史とその発展の瞥見、特に諸外国との比較におけるそれは今後の重要な研究課題とし、およそ入所施設の実践が思想として展開され続けて以来、障害者福祉サービスの実践は、社会関係を中心に、着実にその成果をあげてきた。とりわけ、知的障害者のそれに限れば、発達保

障の考え方を中心に、その成果があげられてきたと言える。

ところが、その一方で、障害者福祉サービスの実践の成果が、社会関係を中心に結実化し、障害者福祉サービスの実践そのものが近代化の道を歩み始めると、入所施設の実践は、次第に物理的・社会的隔離の問題を中心に、知的障害者という個人との間に様々な問題を生じさせ始めることとなる。その一つが、いわゆる障害を持つ人びとの「権利」の問題である。

そもそも障害者福祉サービスの実践は、その方法論上、個人への働きかけを通して、障害を持つ人びとの社会における存在確立を目指すものである。決してそれは個人との間で自己完結するものでもなければ、個人との関係を見捨てた単なる社会運動でもない。英国のノーマリゼーション原理の発展とその実践の深まりに大きく寄与した A. タイネの言葉を借りるならば、その底流に一貫した思想を有しながら障害を持つ人びとの人間としての「生」を創造していく「ライフメイキング (life-making)」<sup>2)</sup>の実践である。

そのような視点に立ったとき、入所施設の実践は、これまでその基本構造が集団生活であるため、その規模が大きければ大きいほど、障害を持つ人びとの生活における「自由」、すなわち誰しもが生まれながらに有する自らの選択と意志を自由に表出させる「権利」に大きな制約を与えてきた。

そして、今日、そのような問題を背景に、この入所施設の実践に代わり実践されているのが、①専門的なサービスや支援を必要に応じて利用でき、②物理的にも社会的にも地域社会に「統合」<sup>3)</sup>され、③いわゆる1972年の米国での集団訴訟判決で明示された「最も制約の少ない環境」<sup>4)</sup>の保障を、およそその基本的原理とした脱施設化に基づく地域生活支援の実践である。

今日、D. フェリスと J. ペリーは、障害を持つ

人びとの「生活の質」について言及し、「多くの知的障害者は独立心や経験、自主性が欠けているために、しばしば他の人々が設定した環境の中での生活を強いられる」(Felce & Perry 1997: 70) と述べている。

また、そのような中、河東田らは、この地域生活支援の実践によってもたらされる「生活の質」の増大が、知的障害者の個人の選択と自由な意志の表出を増長し、ノーマリゼーション原理の実現にかなうものであることを証明している(河東田・中園: 1999)。

つまり、言い換えると、今日、ノーマリゼーション原理が障害者福祉サービスの基本的原理となつて以降、そこでは、これまで障害者福祉サービスの対象者として、常に受身の存在として、その生活を余儀なくされてきた知的障害者が、自らの選択と意志によって、自らの生活や生き方を創造するサービスの主体者として捉えられるようになっている。

### 3. 地域生活支援における人間理解の視点

対人サービスにおける「自己決定の尊重」「利用契約」「説明と同意」などの原則が示すように、従来、障害者福祉サービスの対象者として扱われてきた知的障害者が、サービスの主体者として認識されるようになって久しく経つ。

また、そのような原則は、今日、人間の持っている個別的属性によって価値を見るのではなく、人間であるということを本質とした根源的な部分についての価値に根ざしている。

しかし、他方、社会福祉における対人サービスが、障害を持つ人びとの価値を重視するとき、そこでは障害を持つ人びとをサービスの主体者として認識していく関係におけるサービス提供者が、どのような認識を基点に知的障害者を理解し、その価値観を了解していけば良いのかが問題となってくる。

そもそも A. クラークの「過去何十年間で、専門

家が個人にとって何が最良か、また、何が害であるかを決定する干渉主義から、個人中心のパートナーシップが今後の最良の方向性であるという考え方に大きく変化した」(Clarke 1997: viii) という言葉に集約されているように、これまで社会福祉における対人サービスは、専門家を主体に、知的障害者の側に問題の原因を求め、彼らを一方的に変化させることを目的としながら、その実践を展開してきた。言うなれば、専門家を主体に、一方的に変化させることを目的としてきたため、そこでは専門家を含む障害を持たない人びとの価値観を基準に、その実践を展開してきたと言える。

しかしながら、他方、中園康夫が指摘しているように、そもそも「社会福祉における対人サービスは、主体と主体という関係が成り立っているときにもっとも『福祉的』なのであり、その関係においてこそ、人間の尊厳や共生・連帯といった社会福祉の根本原理が実現する」(中園 2002: 232) ものである。

言うまでもなく、その実践における関係においては、認識する側に他者の価値を尊重する価値観がなければならない。

そのような視点に立ったとき、これまで社会福祉における対人サービスは、障害を持つ人びとの主体としての人間的側面にあまり目を向けてこなかった。障害を持つ人びとの「障害」やその「問題」に目を向けるあまり、彼ら一人ひとりの持つ思い・願い、そして価値観などを十分了解してこなかったと言える。

そして、今日、そのような問題を背景に、この障害を持つ人びとの主体としての人間的側面を重視すべく実践されているのが、いわゆるドイツの哲学者 E. フッサールによって創始され発展してきた現象学をその方法論的基盤に据えた人間理解の方法である。

これまで社会福祉における対人サービスは、ある

意味専門家を含む障害を持たない人びとの価値観を基準に、その実践を展開してきた。そのためその実践においては、認識する側の「わかる」という認識態度を基本に、常に専門家の側から障害を持つ人びとの「現実」が語られ、その価値実現が目されてきた。

しかしながら、そもそも、対人サービスにおける人間と人間の問題を考えたとき、その関係において先ずあるのは、専門家としての〈私〉ではない。言うまでもなく、その関係においてあるのは、専門的な支援やサービスを必要とする人びとの主体としての〈私〉、つまり、障害者福祉サービスで言えば、障害を持つ人びと一人ひとりが、専門家とのかかわりの中で、知覚し感じている「現実」、このことがすべてである。

今日、C. ロジャースは、その著書『人間関係論』の中で、「人間関係を扱う広範囲にまたがった種々の専門職において、効果的である最も重要な要因は、クライアントとの対人的出会いの特質である」と述べ、その基本的条件として、①一致、②共感または感情移入、③（無条件的）肯定的配慮の3つをあげている。

また、その中でC. ロジャースは、対人サービスに従事する人びとの一般的態度の問題について言及し、「私たちは、他の人の世界を、彼の立場からではなく、私たち自身の立場から見る傾向がある」「私たちは、他の人の世界を分析し、評価するが、それを理解しないのである」（Rogers 1967：51－52）と述べている。

したがって、今日、社会福祉における対人サービスは、障害を持つ人びとをサービスの主体者として認識し、その地域生活の充実化を目指す中、そこでは、自らの価値観に「判断中止」をくわえた「わからない」という認識態度に基づく視点を基点に、知的障害者という人間を理解し、そのサービスの提供を目指していると言える。

#### 4. 現象学的理論に基づく人間理解の可能性

障害を持つ人びととのかかわりにおいて、「共感」は、専門家に求められる重要かつ基本的な態度の一つである。

また、この「共感」は、認識する側のわ・か・ら・うとする態度が相手に知覚され、相手にわ・か・つ・て・も・ら・え・たという実感が伴ったときに初めて成立するものである。

ヴァン・デン・ベルクが指摘するように、そもそも現象学とは、自然科学の持つ「主観主義への反動」（ヴァン・デン・ベルク・早坂 1982：93）として登場したものであり、その実践における中心的命題は、「判断中止」「カッコ入れ」などと表現される「現象学的還元」という方法に伴う徹底したわれわれの主体、あるいは主観のありようの重視という部分にある。

前述したように、これまで社会福祉における対人サービスは、「わかる」という認識態度を基本に、常に専門家の側から障害を持つ人びとの「現実」を理解してきた。

そのため、その実践においては、認識する側に、常にある理論的枠組みや価値規範があり、まず、その枠の中で障害を持つ人びとの「現実」を理解すること、すなわち、その存在を客体として扱うことを基本的な態度としながら、知的障害者という人間を理解してきた。

しかしながら、足立叡が「福祉の視点としての『主体的把握』とは、その人の『対象化』を前提にした『対策的』なかかわりではなく、『相互主体的』なかかわりとして、すなわち『ともに生きよう』とするかかわりと過程」（足立 1996：50）と指摘するように、そもそも社会福祉における対人サービスが、主体としての人間の問題を扱う限り、その関係は「相互主体的」なものである。

つまり、人間が物という側面を持った存在である以上、自然科学が物を扱うように人間を客体として

扱い理解することは可能である。

しかしながら、人間が「常に生活環境との接触を保ちながら、環境の変化にそのつど対応して自分自身を変化させて生きている」(木村 1995:25))という主体的・能動的側面を持った存在である以上、そこには人間一人ひとりの持つ独自の意味世界や主観的経験が存在する。

今日、石井秀夫は、その論文『現象学と人間存在』の中で、「主体としての人間を『理解』するとは、自分の見方をカッコに入れ、その人の世界に入っていくことである」「その人の生きる世界と一緒に生きてみることである」(石井 1990:1946)と述べている。

また、その中で石井は、「外在の論理は人間についてたくさんの『説明』をすることはできても、それ自体の世界を理解することはできない」と述べ、「人間について知りたければ人間を見なければならぬ」「こちら側の勝手な論理によって対象を分類するのではなく、まず、はじめに個々の対象をそれ自体の論理にしたがって理解しなければならない(傍点は筆者)」(石井 1990:1946-1948)と述べている。

これまで障害を持つ人びとの価値実現は、ある種、専門家を中心に代弁という形で行われてきた。

しかしながら、このことは同時に問題解決やサービス提供の問題を考える以前に、障害を持つ人びとの声をどれだけ専門家が主体的に受けとめてきたのかという問いをわれわれに投げかけてきたことになる。

少なくとも、社会福祉における対人サービスが、主体としての人間の問題を取り扱う限り、今日、障害を持つ人の存在がどのように認識されるかは、認識する側のものの見方や態度と表裏の関係にある。とりわけ、C. ロジャースの「(他者に)理解しようとする意図を伝えようとすることもまた援助的なものである」(Rogers 1967:52)という言葉が、

特に示唆的であるように、人間と人間の関係の親密さは、ある意味、コミュニケーション手段の良否というよりも、むしろかかわる側のありようこそが、他者にとってはより大きな意味を持つものである。

したがって、今日、現象学を方法論的基盤に据えた人間理解の方法は、認識する側のその独自の意味世界を了解しようとする態度が、相手に知覚されることによって、他者とのあいだに「共感」を創出させる可能性を持ったものであるということが言えるのではないのだろうか。

## 5. 知的障害者の地域生活支援の思想

2002年12月、「知的障害のある21人の声」と題された『もう施設には帰らない』(「10万人のためのグループホームを!」実行委員会編:2002)という本が出版された。恐らく、知的障害者と呼ばれる人びと自身の声が集められたものとしては、わが国最初の出版物である。

そして、その中で知的障害当事者の米田光晴氏は、「僕がきつく伝えること」と称して、次のような言葉を残している。それは「支援する中でA(という人間)とB(という人間)を一緒にするなということです(括弧は筆者)」という言葉である。

この米田氏の言葉は、今日、社会福祉における対人サービスの関係の問題を考える上で、重要かつインパクトのある言葉である。少なくとも「ケースワーク」「ケースマネジメント」、あるいは「ケース記録」という言葉にまで遡れば、今日、社会福祉において、この「ケース」という言葉は、あたりまえに用いられている用語の一つである。

しかしながら、その一方で、では、果たして障害を持つ人びとの個を表す際のこの「ケース」という用語は、今日、いかなる意味を持ちながら用いられているのであろうか。

前述したように、少なくとも人間が物という側面を持った存在である以上、人間の問題を一般化し、

それを普遍的法則にまで高め、それを「ケース」として称することは可能である。

しかしながら、人間、すなわち障害を持つ人びとが、主体的・能動的側面を持った存在である以上、そこには人間一人ひとりの実存性に根ざし、それを「ケース」として捉える認識態度が存在するのも、また事実である。言うなれば、前者を「知の歴史」に根ざした認識態度と表現するならば、後者は人間一人ひとりの「生の歴史」に根ざしたものと言い換えることができる。

そして、このことを踏まえた上で、今日、障害者福祉サービスの実践の一つとなっている地域生活支援の思想を考察した場合、注目すべき言葉が、障害者福祉サービスの実践現場から発せられている。それは、現在、地域生活支援に携わり、前掲書の中で米田氏の言葉に解説をあてている牧野賢一氏の「その人の常識とは長年の生活の中で培ってきたその人の歴史そのものである」という言葉である。

これまで社会福祉におけるサービスは、障害を持つ人びとの存在を客体として捉え、主客分離の関係図式を基本に、知的障害者という人間を理解してきた。そのためその実践を含めた障害者福祉サービスの実践も、入所施設の実践を例に、極めて一般化された知的障害者という人間を「ケース」として扱うことで、その実践を展開してきた。

しかしながら、繰り返しの引用になるが、そもそも「社会福祉における対人サービスは、主体と主体という関係が成り立っているときにもっとも『福祉的』なのであり、その関係においてこそ、人間の尊厳や連帯・共生といった社会福祉の根本原理が実現するもの」である。言うまでもなく、その関係における関係性は、極めて対等なものである。

今日、A. タイネは英国における「ダンピング」、すなわち地域生活を営む障害を持つ人びとの入所施設への逆戻り現象の問題を指摘し、「主としてこれらの歪みは、専門家が障壁をつくり、専門家

が援助を受ける人びとの間に専門的距離をおくときに生じる」(Tyne 1992:76)と述べている。

少なくとも人間と人間の関係が、主客分離の関係のみで営まれるとき、果たして人間は、例えその生活が豊かなものであろうとも、そこに自分が今ここに生きているという実感や感動を持つことができるのであろうか

言い換えると、今日、ノーマリゼーション原理を基本的原理に、障害を持つ人びとの「市民」としての価値が保障された生活の実現が目指される中、地域生活支援の実践は、主体と主体という関係性に基づく知的障害者との「関係」の平等性という思想を有しながら、いわゆる障害を持つ人びとと障害を持たない人びととの近代市民としての権利が平等に享受されたという意味においての関係の平等の実現を目指していると言える。

## 6. おわりに

本研究では、今日、障害者福祉サービスの実践の一つとなっている地域生活支援の思想が、障害を持つ人びとと障害を持たない人びととの関係の平等の実現に向けた主体と主体という関係性に基づく知的障害者との「関係」の平等性にあることを示唆してきた。

しかしながら、その一方で、残された課題は多い。思想が明示されれば当然、そこには根拠が求められる。一つは実証的根拠。そして、もう一つは思想的根拠である。特に後者に限れば、「ひるがえって、わが国の社会福祉理論の状況をみると、わが国の社会福祉理論は、功利主義的人間観・社会観との対峙と社会福祉の必要性の思想的根拠(価値理念)の本格的な研究はほとんど手がつけられておらず、研究の空白部分となっている」(松井 2002:209)という指摘がなされており、社会福祉学研究においては、未踏の部分となっている。

障害者福祉サービスの実践の発展を振り返ったと

き、今日、果たしてわれわれは、今、〈在る〉もの うことが、改めて考えられなければならない時代に  
の価値の確認をどれだけ行ってきたのだろうかとい あるのではないのだろうか。

## 注

- 1) 北海道伊達市は、人口約3万5千人規模の中核都市で、そこには約350名もの人びとが、様々な専門的な支援やサービスを受けながら地域生活を営んでいるところである。なお、この北海道伊達市における知的障害者の地域生活支援の実践の詳細については、次の文献を参照。  
北海道立太陽の園・伊達市立通勤センター旭寮編（1993）『施設を出て街に暮らす』ぶどう社
- 2) 「ライフメイキング（life-making）」とは、障害を持つ人に対する社会の中心的思想、すなわち価値が低められた人びとに対する社会の態度として、W. ヴォルフエンズベルガーによって表現された「デスメイキング（death-making）」という用語への反論としてA. タイネが使用している言葉である。なお、その詳細については、次の文献を参照。  
中園康夫（1996）「第5章ヴォルフエンズベルガーの理論と思想」『ノーマリゼーション原理の研究－欧米の理論と実践－』海声社
- 3) W. ヴォルフエンズベルガーは、この「統合」について言及し、「統合は、それが社会的であるときにのみ意義がある。つまり、統合は、社会的相互作用と受容が含まれ、単に物理的な外観でない時に、はじめて意義があるのである」「物理的な統合は、それだけでは社会的な統合を保障することにはならない」と述べている（Wolfensberger 1981：75）。
- 4) 「最も制約の少ない環境」とは、1972年に障害を持つ人びとが自らの生活する施設・病院における処遇権・治療権の向上の要求をもとに引き起こされた集団訴訟判決の中で明示された言葉である。なお、その詳細については次の文献を参照。  
中園康夫（1996）「第8章ノーマリゼーション原理と集団訴訟」『ノーマリゼーション原理の研究－欧米の理論と実践－』海声社

## 文 献

- 足立勲（1996）『臨床社会福祉学の基礎研究』学文社。
- Clark, A. (1997) Introduction, Brown, I. R. eds. *Quality of Life for People with Disabilities* (=2002, A. クラーク「はじめに」  
中園康夫・末光茂監訳『障害を持つ人にとっての生活の質』相川書房, vii－viii.)
- Felce, D. and Perry, J. (1997) Chapter4, Brown, I. R. eds. *Quality of Life for People with Disabilities* (=2002, D. フェリス・  
J. ペリー「生活の質：用語の広がり」と測定への視点」中園康夫・末光茂監訳『障害を持つ人にとっての生活の  
質』相川書房, 62－79.)
- 北海道立太陽の園・伊達市立通勤センター旭寮編（1993）『施設を出て街に暮らす』ぶどう社。
- 石井秀夫（1990）「現象学と人間存在」『臨床看護』16(13), 1944－1951。  
「10万人のためのグループホームを！」実行委員会編（2002）『もう施設には帰らない』中央法規出版。
- 糸賀一雄（1968）『福祉の思想』, 日本放送出版協会。
- 河東田博・中園康夫編著代表者（1999）『知的障害者の『生活の質』に関する日瑞比較研究』海声社。
- 木村敏（1995）『生命のかたち／かたちの生命』青土社。
- 松井二郎（2002）「社会福祉再編期における社会福祉理論の課題」阿部志郎・右田紀久恵・宮田和明・松井二郎編『戦  
後社会福祉の総括と二一世紀への展望－Ⅱ思想と理論－』ドメス出版, 159－217。

中園康夫 (1996) 『ノーマリゼーション原理の研究－欧米の理論と実践－』 海声社.

中園康夫 (2002) 「ノーマリゼーションの課題」 阿部志郎・右田紀久恵・宮田和明・松井二郎編『戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望－Ⅱ 思想と理論－』 ドメス出版, 221－242.

Rogers, R. C. (1965) *THE COMPLETE WORKS OF C. R. ROGERS*6 (=1967, C. ロジャース, 畠瀬稔編訳『人間関係論』 岩崎学術出版社.)

Tyne, A. (1992) Chapter3, Brown, H. and Smith. H. eds. *Normalization—A reader for the nineties*. (=1994, A. タイネ「第3章：ノーマリゼーション－理論から実践へ－」 中園康夫・小田兼三監訳『ノーマリゼーションの展開－英国における理論と実践－』 学苑社, 11－20.)

ヴァン・デン・ベルク・早坂泰次郎 (1982) 『現象学への招待』 川島書店.

Wolfensberger, W. (1981) *The Principle of Normalization in Human Services*. (=1982, 中園康夫・清水貞夫編訳『ノーマリゼーション－社会福祉サービスの本質－』 学苑社.)